

GA文庫提出用 新企画プロット

『異能バトルは日常系の中で』

2012/01/10

望公太

※前書き。

異能5巻あとがきでも描いてますが、このシリーズは当初、『厨二病を患った少年が、突如異能バトルの世界に巻き込まれるが、普段の厨二妄想で培った知識で活躍する』という話でした。しかし担当さんと話しているうちに、『そこであえて巻き込まれない方が面白いんじゃない？』という事になり、今のような形に。

で、担当さんとの打ち合わせで作品の方向性が決まった後、僕がGA文庫編集部に送りつけたプロットがこちらとなります。

——タイトル

『異能バトルは日常系の中で』

※珍しいことに、僕にとっては珍しいことにタイトルは早い段階から確定していました。タイトルはいつも、最後の最後まで悩んでるパターンが多い。表紙デザイン決める段階になって、『中はひらがなの方いんじゃない？』という話になって、今の形『異能バトルは日常系のなかで』に。

——キャッチコピー&コンセプト

『ある日突然超常の力に目覚めた俺達は、異能バトルの世界に巻き込まれ——なかった！？』 『異能で遊ぶ、全力で』

※プロットは小説の設計図であるだけでなく、作家から編集部に対する企画書的な側面もあるので、コンセプトやウリをこうして書くこともあります。これがそのままオビ文句になったりすることも。

——キャラクター

・安藤寿来（あんどうじゅらい）

主人公、高2、厨二病。

とりあえず世界救いたいと思ってる。厨二発言でみんな困らせることが多い。

その実は、チキンで仲間思いの良い奴。

『ギルディア・シン・呪雷』という自作の真名がある。

能力名『黒焔（ダークアンドダーク）』

黒い炎が出せる。攻撃力なし。焔は旧字体。

・神崎凜子（かんだきりんこ）

※プロット段階ではこんな名前。僕は本文を書く段階でキャラの名前を変更することが多々あります。実際に描いてみると「なんか違うな」って思うことが多々あるのです。

ヒロイン、高2、ツンデレ。

主人公の厨二発言にやれやれと突っ込む係。

しかし、その実隠れオタクであり、みんなが帰った後にこっそり主人公に授けられた技名を叫んだりしている。実は作家を目指しているが、そのことはみんなに隠している。

『異能バトルは日常系の中で』プロット

能力名『永遠（クローズドクロック）』

時を操る。時を止めたり、時をぶっ飛ばしたり、時を加速させたり。

・櫛川鳩美（くしかわはとみ）※鳩子も最初はこんな名前。

ヒロイン、高2、天然

主人公の従兄弟で幼馴染み。

のほほんとして温厚な性格。主人公の厨二病に付き合っあげてあげるいい子。

小学校の頃、クシ、カワ、鳩、という名前から、「焼き鳥ちゃん」というあだ名を着けられていて、ひどく嫌がっていたが、主人公が「そんなダサイ二つ名は俺が許さん！」という感じで助けられて、それ以来好意を抱いている。

能力名『五帝（オーバーエレメント）』

地水火風光の5つの属性を自在に操ることができる。

ただし、黒い炎だけは出せない（読者になんかあるんじゃない？と思わせておく伏線）

※なんかあるかと思ったけど、そんなことはなかったぜ！ いやもしかしたらこれからあるのかもしれない……。

・姫木千冬（ひめきちふゆ）

ヒロイン、中二、無口、ロリ。

文芸部顧問の姪っ子。

常にボケっとしていて。あんまり喋らないが非常に賢い。やや天然。生活力低し。

高校の生徒ではないが、能力を使って空間を操作し、毎日のように文芸部に遊びに来ている。

能力名『創世（ワールドクリエイター）』

※安藤が文芸部に与えたネーミングは、全部二文字九文字という話があったと思いますが、ぶっちゃけあれは偶然の産物です。いざ一巻書いてみたとき、千冬ちゃんの異能以外、全部ルビが九文字だったため、運命を感じて千冬ちゃんの異能名を修正。自分でも驚いた。こういうことがあるから創作は面白い。

なんでも創造できる。本人が見たことがないものでも、星の記憶を呼び覚まし、創造可能。異空間を創造することも可能で、主人公達の溜まり場もこの子が超快適空間に改造している。

『異能バトルは日常系の中で』プロット

・高梨桃代（たかなしももよ）※最初こんな名前。灯代が「これしかねえ」となったため、名前がかぶってるこっちを変更することに。

ヒロイン 高3 お姉さん系
一歩引いて笑ってる感じ。クールで毒舌でドS。

能力名『始原（ルートオブオリジン）』
物体をあるべき姿に還す。クレイジーダイヤモンド的な能力。

——主人公が厨二的ななにかをしたときのリアクション。

神崎——やれやれ

櫛川——ええーっ？

姫木——ぼけー。

高梨——うふふ。

——サブキャラ

・工藤秀平

※工藤さん、なんと最初は男！ 終盤書き始めるまで、ずっと男のつもりだった。けどいざ登場させる段階になって、「ここで男出てきてもなんも楽しくねえな」と思い急遽女に。女にして本当によかった。本当によかった！

生徒会長。文芸部を廃部にさせようとネチネチと攻撃してくる。

実は一卷のラスボス。

敵のスキルをコピーできる。

しかし、最初に主人公の異能をコピーした結果、能力を見破られて、みんなが能力を使ってくれなくなり、コピーができなくて敗北する。

結果仲間となり、後に主人公に能力名『強欲（グレートフルラバー）』を授かる。

・桐生一

神崎の義兄。厨二病。

神崎のオタクな感じはこいつの影響。

ラスボスっぽい奴。

能力名『墮天使の鉄槌は愚者へと振り下ろされる（ルシファーズストライク）』

『異能バトルは日常系の中で』プロット

——世界設定

三ヶ月前、文芸部四人とたまたま文芸部にいた顧問の姪っ子である姫木千冬に、途方も無い異能力が目覚めた。

五人は自分達になぜ能力が目覚めたとか、どこかに倒すべきいるのではないか、とか散々考えるが、結局なにも起こらないので、いつも通りの日常を歩むという結論を出した。

※現代もので、日常系なので、あんまり書くことがない。

——ストーリー

第一章

キャラ紹介しつつ、部室でダラダラと話す。

※プロットにすれば一文だけど、このダラダラが一章の大半である。

そして最後、下校途中に車に轢かれて死んだ猫を発見する。

主人公ズは、高梨の『始原』の能力で元に戻す。

そこで、その行為は正しいのか否かの葛藤が全員に起こるが、主人公ズは、すでに「きっと世界というものは、こんなチート能力があってもどうしようもない。だから俺達は使いたいときに使いたいように能力を使おう。おそらくそれでも世界は動かない」という結論を出していた。

ので、やりたいように、存分に能力を使う。

第二章

二つ名をつける話で、なんか面白いやりとりをする。

※割りとこういう、自分への無茶振りが多い。いやでも、プロットじゃこう書くしかないんだよ……。

最後に神崎視点を入れる。神崎は榊川から、主人公が小学校のときに二つ名をつけることで榊川を救っていたという事実を聞き、少し心が動く。

第三章

神崎が作家を目指していることが発覚する。

主人公は馬鹿にせず、至極真面目に向き合う。

※短っ！

第四章

神崎の兄である桐生が現れ、主人公と意気投合する。

しかし、神崎と合流し、家族に微妙な問題があることが発覚する。

そこで、二人は「どんな異能があっても、作家にもなれなければ、家族の問題も解決できない」と考え、異能の虚しさを描く。

第五話

生徒会長が敵だったということが発覚するけど、なんだかんだで倒す。

これからいったいどうなるんだ、という感じで一卷は終わる。

※おそろしく短っ！ まあ思い切ってぶっちゃけると……プロットは書いてると最後の方で若干飽きてくるのだ。「さっさと本文書かせろや」という気分になる。

※後書き。

新作の『最強喰いのダークヒーロー』のプロットと比較してもらえればわかると思いますが、新作のプロットとしてはあり得ないぐらいに短いし、適当です。本来はこんなプロットはまず通らない。

ていうか、厳密に言う通ってない。

「ダメなら全ボツでいいから、とりあえず本文書かせて一」とお願いして、補欠合格にもらった感じである。そして一卷を書き上げて、担当さんからオッケーをもらって出版する運びに。

いわゆる日常系に属する話は、キャラの掛け合いや空気感みたいなものが非常に大事なので、プロットで面白さを伝えるのが凄まじく難しいんですよね。異能一卷にしても、プロット単体で読んだら、なにが面白いかわからんと思いますし。

なお、当時の僕は、キャラの二つ名を考えただけで結構満足してて、『この二つ名センスを編集部に見せつければ、まず間違いなく通るだろう』と確信していた。

まだ若かったのである。